

ので、閉鎖術施行し、十分な降圧療法下で経過良好である。後者は肺血管抵抗が 13.9 単位・ m^2 と高度の肺高血圧を示し、両方向シャントであったが、手術は行われなかった。肺血管抵抗の可逆性の判断が問題となった。

5) 心奇形を合併した新生児外科症例の検討

大沢 義弘・岩淵 真 (新潟大学付属病院
小児外科)

心奇形を合併する小児外科疾患の中で治療上問題となるのは食動閉鎖症や横隔膜ヘルニア等を主とする新生児外科疾患であり、その治療成績は不良である。そこで、これら新生児外科疾患につき検討し報告する。

昭和41年より61年までに経験した新生児外科症例は526例(死亡例97, 18%)で、心奇形を合併したものは38例(7%)であり、そのうち死亡は21例(55%)であった。

食道閉鎖症、横隔膜ヘルニアは各々44例、30例(死亡15例:34%, 13例:43%)で心奇形は18例、8例に合併し、そのうち11例(61%), 8例(100%)が死亡した。心臓手術は9例に行われ4例が死亡した。

6) 一地方病院小児心臓病診療からみた先天性疾患

竹内 衛・柳本 利夫 (国立療養所新潟病
塚野 真也・鈴木 幸雄 院 小児科)
東条 恵・小沢 寛二

昭和60年5月より同63年1月までの2年9箇月の間に当院小児心臓病科で診察した265例につき検討した。男134例、女131例で、年齢は新生児から44歳に及び、新生児から2歳、6歳、および12歳にピークが認められた。

疾患別では、先天性が89例(33.6%)、後天性が112例(42.3%)、その他が64例(24.1%)であった。先天性では心室中隔欠損が44例とその約半数を占め、この他では心房中隔欠損11例、肺動脈狭窄11例、ファロー四徴9例、動脈管開存8例などが頻度の高い疾患であった。これらの内、心臓カテーテル検査を、及び手術を要するものは、新潟大学医学部、および立川総合病院に紹介し、心臓カテーテル検査を受けたもの20例、手術を受けたもの10例であった。なお遠隔死亡は2例であった。また、新生児期に23例の受診があり、これは当科のミニ NICU(責任者 柳本)の影響が大であると考えられた。この他、アイゼンメンジャー症候群が3例にみられ、今後とも無視できない問題点であると考えられた。

後天性では川崎病が69例、不整脈が34例と多く、これに対して弁膜症は3例と少なかった。6歳と12歳とに年齢分布のピークをみているのは学童心臓検診のためと考

えられた。

地域的な先天性心疾患診療の向上のためには、専門医の充足も必要だが、それが可能となるまでは新生児科医や学童心臓検診への協力、病院間の連携等のシステムをより一層進めなければならない。小児循環器医の一層のサービスが必要である。

7) 心室中隔欠損症兼大動脈弁閉鎖不全症の手術と遠隔成績

今泉 恵次・金沢 宏 (新潟大学第二外科)
宮村 治男・江口 昭治

手術後10年以上経過した心室中隔欠損症兼大動脈弁閉鎖不全症37例について、大動脈弁の術式により症例を人工弁置換-AVR群、大動脈弁形成術-AVP群、無処理群に分け、その予後と現在の心機能を検討した。

結果 AVR群11症例、大部分初期の症例で使用弁種はS-E弁10例、B-S弁1例、4例手術死、3例脳塞栓死、2例事故死。生存2例(術後18年、19年経過)は塞栓の既往なくNYHA 1度である。

AVP群は19症例、3歳時AR III度例が4年後突然死した。再手術は3例、1例AR増強で1年後、2例がIEで13、14年後AVRとなった。残る15例は1例を除きARは改善し、生活制限はない。

無処理群7症例、術後11-21年を経てAR消失4例、I度1例、他2例は心雑音なく、最低血圧も正常域で、通常の日常生活を営んでいる。

結語 AVR群は初期の開心術補助手段の未熟さ、抗凝固療法の不徹底さなどにより成績不良であった。AVP、無処理群は、ほぼ満足な結果であったがIE発症には注意すべきである。

8) 高齢者における先天性心疾患症例の検討

片桐 幹夫・鈴木 万里 (立川総合病院心臓
山本 和男・中沢 聡 (血圧センター胸部
春谷 重孝・坂下 勲 外科)

当院における高齢者先天性心疾患手術症例を検討したので報告する。昭和44年から62年までの19年間の開心術症例総数は1293例で、先天性心疾患は633例(49.0%)であった。

30才以上症例は132例(20.9%)で、ASD 98例、VSD 12例、ECD 9例、PS 3例、その他10例で、平均年齢は44才、手術死亡は0であった。

最近6年間で高齢者手術症例が増加したが、これは主としてASD症例の増加に起因すると思われた。ASD

症例では加齢に伴い心房粗細動・逆流性弁膜疾患の合併率が増加し、術後の回復も遅延することが示唆された。

高齢者 ASD 症例では、手術の危険度も考慮すると無症状でも早期手術が適応となるものと思われる。

一 般 演 題

1) 心エコー図で cystic な所見を呈した左房内腫瘍の 1 例

石黒 淳司・小玉 誠 (新潟こぼり病院)
土谷 厚・矢沢 良光 (循環器内科)
坂内 省吾・小沢 武文 (聖園病院 内科)

症例は、66才男性。主訴は動悸及び夜間起坐呼吸。家族歴に特記すべき事はなし。既往歴は22才頃に肋膜炎、肺炎にて入院治療を受けた。現病歴は、昭和62年夏頃より動悸、息切れが起きるようになった。11月頃より労作時呼吸困難及び咳嗽、喀痰を認めるようになった。徐々に夜間起坐呼吸、食欲不振となり11月20日某病院を受診した。そこで心不全、左房内腫瘍を指摘され入院となった。その後11月26日手術目的にて当院転院となった。入院時理学的及び検査所見は、両肺野の湿性ラ音、心収縮期雑音及びIV音を認めた。胸部X線写真で胸水、右肺気腫、左肺陰影及び肺紋理の増強を認めた。肝逸脱酵素の軽度上昇。腫瘍マーカーの上昇は認められなかった。心エコーにて、左房内に約3×5×4cmの腫瘍を認め拡張期に左房内に嵌頓しかかっていた。その内部にcystを認めた。このようにcystを有する心房内腫瘍はきわめて稀であり当院での心房内腫瘍の4例と共に提示する。

2) 先天性冠動脈瘻の外科治療

金沢 宏・宮村 治男 (新潟大学第二外科)
江口 昭治

教室で経験した先天性冠動脈瘻手術例は6例である。右冠動脈右室瘻3例、右冠動脈左室瘻2例、左冠動脈回旋枝(側枝)右房瘻1例である。最近手術を施行した左冠動脈回旋枝右房瘻と右冠動脈右室瘻の計3例の映画を供覧する。

左冠動脈回旋枝右房瘻症例では、体外循環下に右房を切開し、瘻孔を右房内より閉鎖した。術後1年の冠動脈造影では流入動脈は拡大したままであり、瘻孔部の瘤が残存していた。右冠動脈右室瘻の2例では、術前の冠動脈造影で右冠動脈の拡大と瘻孔部の動脈瘤をみとめた。手術は体外循環下に瘤を切開し、瘤内より瘻孔を閉鎖し瘤も縫縮した。術後の冠動脈造影では右冠動脈の拡大は消失していた。

3) A-C バイパス術 250 例の経験

春谷 重孝・鈴木 万里 (立川総合病院)
山本 和男・中沢 聡 (胸部外科)
片桐 幹夫・坂下 勲

昭和57年より本格的に A-C バイパス術を行って以来、昭和62年までに250例に達した。

手術時年齢、冠動脈病変枝数、移植グラフト数は年次毎に増加傾向を示した。手術死亡は250例中10例、4%であったが、このうち7例は緊急手術例であった。昭和58年より PTCR、昭和59年より PTCA を開始したが、この2年間の A-C バイパス症例は著しく増加し、特に緊急手術例は50%近くにも達した。その後 PTCA の発達とともに緊急手術例は減少したが PTCA 後の A-C バイパス症例が増加した。最近 LAD へは積極的に IMA グラフトを用い良好な結果を得ている。手術死亡や Perioperative myocardial infarction の頻度の高い PTCA 後の緊急手術例を除けば、成績は満足すべきものであった。

第47回新潟消化器病研究会

日 時 昭和63年2月27日(土)
午後1時30分より
会 場 新潟ワシントンホテル

一 般 演 題

1) 食道癌の食道気管支瘻症例における体内人工食道チューブの1使用例

朴 鐘千・山本 賢 (田代消化器科病院)
田代 成元 (内科)

症例は57才の男性、咳を主訴として近医受診、治療を受けていたが胸部X線にて右胸水出現した為紹介され当院入院した。入院後嚥下困難を訴えた為食道透視を施行、Im から Ei にかけてラセン型の食道癌を認め、右 S₆ への食道気管支瘻も認めた。絶食、IVH により様子を見ていたが、咳嗽が増強してきた為食道内挿管の適応と考え、住友ベークライト社製人工食道を内視鏡をガイドとして挿入した。挿入後経口摂取可能となり、咳嗽も軽快し、約6週間軽度の異和感のみで良好に経過した後、序々に全身状態悪化し死亡した。食道気管支瘻に対する食道内挿管法は、患者のクオリティオブライフを高めるのに極めて有用であると思われた。